

岡垣の歴史と風土⑥

―「平家物語」余話 たるみ山（垂見山）と鶉濱―

岡垣歴史文化研究会 石井 邦一

「平家物語」は、今から780年ほど前の承久・仁治年間に書かれた、平家一門の栄華と没落までを語った古典である。

この巻第八「太宰府落」の条は、都落ちで、まだ幼い安徳天皇を擁して太宰府まで落ちのびてきた平家一門が、ここに豊後の緒方惟義が三万余騎の勢で攻めてくるとの報で、せっかく落ち着いた太宰府から再び落ちのびる逃避行の様子を、次のように書いている。

「…水き(城)の戸を出て、かちはだしにて我さきに前にと箱崎の津へと落給へ。おりふしくたる雨車軸のごとし。吹風砂をあぐとかや。おつる涙、ふる雨、わきていづれもみえざりけり。住吉・管崎・香椎・宗像ふしおがみ、ただ主上舊都の還幸とのみぞ祈られる。たるみ山・鶉濱(ん)どいふ峨々たる嶮難をしのぎ、渺々たる平沙へぞおもむき給ふ。いつならはしの御事なれば、御足よりいづる血は沙をそめ、紅の袴は色を

まし、白袴はすそ紅にぞなりにける。彼玄舁三藏の流沙・葱嶺を凌がれけんくるしきも、是にはいかでかまさるべき。…」

この都落ちには、安徳天皇・二位尼(清盛の妻)・建礼門院とその女官たち・宗盛・時忠・敦盛など公卿10人、信基など殿上人16人、そのほか律師や家人ら7千余人を数える逃避行だったという。

文中にある「たるみ山」が、湯川山とその鞍部の垂見峠を指しており、「鶉濱」は当時は内海だった内浦のことである。このころは、内浦と手野の間はまだ海だった時代である。内浦の小字地名にある「横波」は、その内海を渡る場所の意味と思われる。

さて、この後安徳天皇の一行は、芦屋の山鹿城主だった山鹿秀遠に出迎えられ、3千の兵が安徳帝を護ったといわれる。秀遠は、この当時の政権を握っていた摂関家藤原北家の出で、平家一門とは身近な存在だったからである。

時に寿永元(1182)年8月のことである。この後、秀遠は安徳帝を奉じて屋島に行き、最後は長門壇ノ浦合戦で源氏と戦った。

こうした経緯からも、この時代の垂見峠は太宰府に至る主要な官道だったことがうかがえる。

鶉濱とある内浦も、この太宰道の難関だった峠道の、登り口に当たる大事な関門であった。

この峠越えを「峨々たる嶮難」と書いてあるのは、いささか大げさの感があるが、人目を避ける逃避行であるだけに、道なき道の山越えだったのであろう。

やっとの思いで山鹿城に着いた一行は、しばしの憩いを取り、9月十三夜の冴えた月を愛で歌を詠んでいる。その中で平大納言時忠が詠んだ歌を紹介する。

君住めばこも雲井の月なれど
猶恋しきは都なりけり

この後、豊後の緒方惟義の大軍



▲物語の舞台となった湯川山(写真左)と垂見峠(写真中央)

が攻めてくるとの報で、山鹿秀遠は安徳天皇一行を船で柳ヶ浦に導いた。柳ヶ浦は、現在の北九州市門司区大里のことである。

大里の地名は、安徳天皇の一行がここに滞在し、此処がしばしの内裏、すなわち御所・禁裏とされたことから内裏Ⅱ大里となったものである。「祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響あり。…」に始まる「平家物語」の哀切な物語の中で「たるみ峠」と「鶉濱」の項は悲痛な余韻のようである。